

情緒発達と自閉症

1. はじめに

一九四三年、カナーが最初に自閉症についての報告をしてから半世紀が経過した。この間に積み重ねられた多くの研究や実践によって、自閉症は親の養育態度などが原因で生じる心因性の情緒障害ではなく、胎生期や生後早期に多様な原因が作用して起こる、中枢神経系の機能障害を基礎に持つ発達障害であると考えられるようになってきた。

自閉症の基本的な行動特徴は、言語発達および社会性・対人関係の障害、固執的・常同的行動の三つであり、これらが幼児期に現れてくる。一九八七年にアメリカ精神医学

若松 昭彦

(広島大学学校教育学部講師)

会が発表したDSM-III-Rは、こうした自閉症の行動を詳細に定義した国際的な診断基準の一つである。表(次ページ参照)には、本稿のテーマである情緒発達と特に関連するであろうA項の「对人的相互作用における質的な障害」とB項「言語性および非言語性の意志伝達や想像的な活動における質的な障害」の一部を示した。

ところで、前述の情緒障害と自閉症の関係についてであるが、一般に情緒障害とは、感情的葛藤などの心因により情緒・行動・身体の障害を起こしている状態をさす。この意味では、障害の生物学的基盤を有する自閉症は情緒障害とは異なっているが、情緒の障害が症状の中に現れているという広義の情緒障害の立場からは、その中に含まれると



下記の10項目の中で、少なくとも8項目が認められること。ただし、A項から少なくとも2項目、B項とC項からそれぞれ1項目を含むこと。
 (注意) その子どもの発達水準にてらして行動が異常とみなされ、かつ各項目の基準を満たしている場合に限り。

A. 下記のように現れる、対人的相互作用における質的な障害

- (1) 他者の存在または他者の感情に気づくことの著しい欠陥 (例：人を一個の家具であるかのように扱う；他人の苦痛に気づかない；他人にも私生活が必要であることを理解できないようにみえる)
- (2) 苦しい時に安楽を求めようとしないこと、または異常な求め方 (例：病氣やけが、または疲弊した時でさえ、身体を楽にしようとし、常同的な方法で楽になるうとする、たとえばけがをした時いつも「チーズ、チーズ、チーズ」という)
- (3) 模倣することの欠如、またはその異常 (例：ハイハイと手を振らない；母親の家事活動を真似しない；状況にそぐわないように他人の行為を機械的に模倣する)

- (4) 社会性の必要な遊びの欠如、またはその異常 (例：単純なゲームにも積極的に参加しない；孤立した遊びを好む；“機械的な道具”としてののみ他の子を遊びに加える)

- (5) 仲間関係を作る能力の著しい異常 (例：仲間関係を作ることに関心が無い；友達を作ることに関心はあるが対人的相互作用における習慣を理解することができない、たとえば興味を示していない仲間と電話帳を読んで聞かせる)

B. 下記のように現れる、言語性および非言語性の意図伝達や想像的な活動における質的な障害

- (1) 意思を伝達する喃語・表情・身振り・物真似・話し言葉などといった、意図伝達様式がないこと
- (2) 非言語的意図伝達、たとえば、視線を合わせることで、顔の表情、身振り、またはジェスチャーなどを使って、対人的相互作用を開始し調節することの著しい異常 (例：抱かれることを期待しない、抱かれると身体をこわばらせる、対人的な接近をしようとする時に人を見たり微笑んだりしない、両親や来客者に挨拶しない、人の集まった所でジーンと見詰めたままている)

- (3) 想像上の活動の欠如、たとえば大人の役割、空想的な人物や動物になって遊ぶこと、想像上のでき事に関する話しへの興味などの欠如

- (4) 声の音量・高さ・強度・速度・リズム・抑揚などを含む、会話の表出法における著しい異常 (例：単純な口調、質問するような調子、か
ん高い声)
- (以下省略)

いえよう。例えば、幼少期に顕著な対人関係形成の困難さ、極端な感情表出や気分の易変性、場面不適応による二次的な情緒障害、感情理解のむずかしさ、表情の乏しき、意欲・自発性の低下、青年期パニックなど、自閉症の情緒面の障害は多彩であり、また、障害の程度や年齢によってもその現れ方は変化する。次節ではまず、乳幼児期の特徴としてよくあげられる愛着行動の問題について触れてみることにしたい。

2. 乳幼児期の愛着行動

自閉症の二歳半頃までの早期徴候としては、あやしても笑わない、人に抱かれることを嫌う、視線が合わない、おとなしい、喃語が少ない、睡眠が短い、表情の変化が少ない、動作模倣がない、指差しをしない、親の後追いをしない等が一般にあげられる(白瀧、一九九二)。しかしながら、他の発達障害と比較して、自閉症のみに特徴的な徴候を調べた実証的研究は少ない。白瀧(一九九二)は、一歳半健診を受けた約三五〇名の対象児より、二四名の全般的精神発達遅滞児と六名の自閉症ハイリスク児を発見した。後者の大きな特徴は、母親の存在に全く無関心に見える、名前を呼んでも振り向かないなど、母親との間に愛着関係が

十分確立されていないことであった。この結果より、愛着関係未確立はかなり特異的な自閉症ハイリスク児の早期徴候であるといえるだろうと白瀧は述べている。

一方、小泉(一九八七)も、一歳半健診などを利用して、自閉症、精神遅滞、発達性言語障害の乳幼児期の行動特徴を健常児と比較した研究について報告している。チェックした内容は、やはり母親との情緒的な結びつきの形成を示す愛着行動とほぼ重なる行動であった。その結果、チェック・リストの一三項目中、自閉症は全例が九項目以上の項目に該当しており、精神遅滞、発達性言語障害はそれぞれ八項目、六項目以上に該当していた。しかしながら、各項目別の生起率を三群で比較したところ、ほとんど差が認められなかった。すなわち、自閉症はより多彩な乳幼児期の行動発達の遅れや偏りを示す傾向にあったものの、それらの大部分は自閉症ばかりでなく他の発達障害にも見られるものであった。

ところが、三歳代までの行動特徴を比較した同様の研究では、人見知りがない、後追いしない、簡単な模倣をしない、指差しをしない、呼んでも振り向かないなど、やはり愛着行動や対人関係に関連した項目で、自閉症は精神遅滞や発達性言語障害よりも生起率が明らかに高くなっていった。以上の結果は、自閉症以外の発達障害では、標準的な発

達から遅れながらも愛着行動が次第に発達していくのに対し、自閉症の愛着行動の出現はさらに遅れることを示唆するものである。村田（一九八〇）は、母親に甘えに似た感情が向けられ、心理的な結びつきがより強くなってきたという印象を受けるのは五歳を過ぎる頃からであると述べている。

ところで、小泉（一九八七）は、乳児期の行動発達が正常な自閉症が少数ながら見られたことを認めている。F. J. F.（一九九二）も、生後一年までの正常発達が認められた例を報告しており、こうしたケースは発達レベルが高い場合に多いことを示唆している。これに関しては、乳児期の終りまでは成熟しない特定の精神能力の欠陥をこうむる可能性（Fritz, 一九九二）や脳機能の脆弱性あるいは変性（太田・永井、一九九二）などが推定されている。

3. 情緒発達と愛着行動

生後二カ月ぐらゐまで顕著な情緒表出は「泣き」である。泣きは、母親の養育行動の適不適をフィードバックし、乳児の欲求のリズムへの適応を促進する（Enders, 一九八五）。また、母親は乳児の欲求に応じた積極的な世話を通じて、乳児に対する愛着を強めていく。

その後、微笑が生じてくると、母親との情緒的なつながりは格段に強まる。母親は乳児がよくわかるようになり、一緒にいることに喜びを感じる。乳児も母親とのかわりを通じて、さらに情緒面の豊かさを増し、母親との一体感を強めていく。一方、母親との結びつきが強くなる反面、母親と離れることに対する不安な気持ちも育ってくる。

七〜八カ月になると、人見知りが始まる。人見知りの出現は、母親への愛着、人の弁別能力、そして恐れ感情などが順調に発達していることを示している。また、母親は自分だけに向けられた乳児の愛着を実感し、相互の心理的な絆がますます強められる。

以上のように、情緒の発達は愛着行動の形成に深く関与しているといえるであろう。

乳幼児期の自閉症の情緒発達については未解明な部分も多いが（Fritz, 一九九二）、前述した小泉（一九八七）によると、一〇名中八名が、一歳半までの行動で「ほとんど泣かなかった」、「おとなしくて手がかからなかった」と評価され、五名が「あやされてもほとんど笑わなかった」、また九名が「人見知りがほとんどなかった」と報告されている。乳児側からの自発的な情緒表出が少なく、それに対応した母親の養育行動も結果的に少なくなるであろう。また、働きかけに対する情緒反応の乏しさは、母親のかわりを

動機づける機会を減少させたり、一方的あるいは不適切なタイミングでの働きかけを多くしてしまうことも考えられないかと推測される。しかしながら、自閉症の愛着行動の形成が他の発達障害に比べ、なぜ一般に遅れるのかという問いに答えるのは容易ではないように思われる。

ところで、人見知りによる泣きは、見知らぬ人に対する恐れ的情绪表出であることは前述した。それまで平気で高い所に登ったり、走り回っていたりしていた自閉症の子どもが、母親などとの対人関係が成立してくると、それらを怖がってやらなくなったなどという逸話は、これとの関連で興味深い。状況の認知や評価、結果の予測等が可能になり、愛着関係成立によって育まれた基本的な安心感を脅かす特定の人や状況に対する恐怖心が出現するようになるのであると考えられる。

4. 感情理解・表出の研究

対人関係の障害が前面に出ていた乳幼児期を過ぎると、個人差はあるが、母親や家族との関係が改善され、好きな友だちができるなど対人関係の広がりが見られるようになってくる。また、発達レベルに合った課題に応じたり、

他人の模倣をしようとするなど、学習の姿勢が次第に整い、その子なりの成長発達を遂げていくようになる。

しかしながら、かなり発達レベルの高い青年や成人の場合でも、一方的に自分が関心のある話題を話し、相互的な会話が成立しにくい、他人の言動に対応した社会的行動がとれない、感情移入や共感性の障害が持続するなどの問題を持っていることが指摘され、自閉症の社会性障害に関する研究の必要性が強調された(Rutter, 一九八三)。そして、それに応じて感情の理解や表出を扱った研究が近年盛んに行われてきた。

例えば、Hobson (一九八六a) は、喜び、悲しみ、怒り、恐れを感情を表出した身振り、声、状況のビデオを作り、それぞれを感情を表出した表情写真とマッチングさせた。その結果、精神年齢を合わせた健常群や精神遅滞群よりも自閉症群の成績が低かった。彼らの生活年齢は一〇歳代、精神年齢は平均一〇歳であり、感情以外の事物の同様なマッチング課題では、感情の場合とは対照的に良好な成績であった。

また、Weeks and Hobson (一九八七) は、平均年齢一五歳の自閉症群に、性、年齢、表情、帽子がそれぞれ異なる組み合わせの顔写真を分類させた。その結果、生活年齢および言語能力を合わせた精神遅滞群の多くは、帽子より

も表情を優先して分類したが、自閉症群の大部分は表情よりも帽子を優先して分類し、最終的に指示しても、三分の一の者が表情による分類ができなかった。この結果は、自閉症群の他人の表情に対する感受性の低さを示すものであると結論された。

一方、感情の表出については、Attwoodら(一九八八)が身振りの使用に関する研究を行っている。その結果、生活年齢一〇歳代の自閉症群は、「静かに」「おいで」「上を見て」など誰かに何かを行わせるためのジェスチャーならば、頻度は少ないもののダウン症群や健常群と同様に日常場面ですべて使っていたが、慰めや友情、困惑、愛情などの感情を意図的に伝えるためのジェスチャーは誰も使わなかった。一方、ダウン症群や健常群ではこれらのジェスチャーが使用されていたことが明らかになった。

また、大人とやりとりしている際の肯定的な表情表出が対照群より少ないこと(Kasariら、一九九〇)、一貫性のない肯定的表情と否定的表情の奇妙な混合、特異的な表情表出などが指摘されている。こうした感情表出の特異性は音声表出の場合も同様であることが以前に報告されており、通常は一歳頃より学習されはじめる情緒表出の社会化の過程に困難を有していることがうかがわれる。

5. おわりに

青年・成人期に達しても、自閉症の社会性の障害が持続することについては前述したが、発達水準が高い場合には、他人の気持ちがあわかったり、同心情を示す場合も認められるという(村田、一九八〇、Firth、一九九二)。しかし、他人の観点や役割、立場などを考慮した上での「共感」は大変困難であり、高い能力を持つ人の場合でさえも、こうした領域での「認知」能力を欠いているといえる。

母親との愛着関係を基盤とした相互的なかわりを通じて、子どもは他人の行為やことは、情緒表出の意味、事物の名前や機能、後の会話や社会的な関係に通じる交替によるやりとりのルール、行動の調整能力や適切な情緒表出の仕方などさまざまな力を身につけていく。高機能の自閉症にも依然として残る「認知」能力の障害と、こうした初期発達との関係についても今後検討していく必要がある。

一方、二〇〇余例の感情表出を調べた杉山(一九九〇)によると、重度の自閉症では、全年齢を通じて怒りの感情表出が圧倒的に多く、またパニックも多かった。自己刺激的活動以外での喜びの表出も少なく、悲しみの感情表出もほとんど見られなかったという。それに対して、中等度の

場合には、三歳頃から怒りの一方的な表出は減り、遊び場面で喜びの表出が現れた。悲しみの感情表出は、学童期を過ぎて明らかに認められた。また、高機能の自閉症では、喜びの表出は幼児期早期から、悲しみも幼児期から見られていたが、原因不明の不安なども多く認められた。

このように、障害の重さと情緒発達の水準の間には対応が認められるようであるが、情緒が本来、知覚、認知、学習等の他の精神機能や身体的機能など、人間の全心的能力とともに、生存のための適応機制として発達してきたと考えるならば(戸田、一九九二)、こうした関係はむしろ当然であるかもしれない。自閉症の情緒発達を考えたり、援助したりしていく際にも、情緒以外の多様な側面との関係の中で総合的にとらえていくことが重要であるように思われる。

【文 献】

- Attwood, A., Frith, U., & Hermelin, B.: 1988 The understanding and use of interpersonal gestures by autistic and Down's syndrome children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 18, 241-257.
- Emde, R. N., Gaensbauer, T. J., & Harmon, R. J.: 阿部秀雄 監訳・安藤則夫訳: 乳児期における情緒の表われ 風媒社 一 九八五
- Frith, U.: 富田真紀・清水康夫訳: 自閉症の謎を解き明かす 東京

書籍 一九九一

- Hobson, R. P.: 1986 a The autistic child's appraisal of expressions of emotion. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 27, 321-342.
- Kasari, C., Sigman, M., Mundy, P., & Yirmiya, N.: 1990 Affective sharing in the context of joint attention interactions of normal, autistic, and mentally retarded children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 20, 87-99.
- 小泉数: 乳幼児期の発達と行動 山崎晃資・栗田広編 自閉症の研究と展望 東京大学出版会 二七四—四八 一九八七
- 村田豊久: 自閉症 医歯薬出版 一九八〇
- 中根允文: 自閉症の診断と治療的アプローチ 有馬正高編 発達障害医学の進歩 2 診断と治療社 六五—七四 一九九〇
- 太田昌孝・永井洋子編著: 自閉症治療の到達点 日本文化科学社 一九九一
- Rutter, M.: 1983 Cognitive deficits in the pathogenesis of autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 24, 513-531.
- 白籠貞昭: 自閉症の乳幼児期における早期発見 有馬正高・黒川徹 編 発達障害医学の進歩 3 診断と治療社 三八—四四 一九九一
- 杉山登志郎: 自閉症—最近の研究の進歩 精神科治療学' 5' 一五〇—一五五 一九九〇
- 戸田正直: 感情 東京大学出版会 一九九二
- Weeks, S. J. & Hobson, R. P.: 1987 The salience of facial expression for autistic children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 28, 137-151.